Osaka University Knowledge Archive

Title	まえがき
Author(s)	浜渦, 辰二
Citation	子育ての現象学. 2023
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91214
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

まえがき

浜渦　辰二

本書は、３年前に共同研究「北欧現象学者との共同研究に基づく人間の傷つきやすさと有限性の現象学的研究」（2016～2018 年度、基盤研究（B）（一般））に基づき制作し、オンラインのみで刊行した研究成果報告書・拙編著『傷つきやすさの現象学』（2020 年、大阪大学学術情報庫：https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/）を継承しながら、新たな課題に取り組んだ共同研究「子育ての現象学―フィンランド・ネウボラをフィールドに―」（2019～2022 年度、国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(B)））の研究成果報告書・拙編著『子育ての現象学』を同様にオンラインで刊行するものである。

日本の現象学研究者がフィンランドのネウボラ（出産・子育て支援センター）のフィールド調査をフィンランドの現象学研究者とともに国際共同研究として行うという計画で、当初、共同研究の期間としては 2019～2021 年度の３年間の計画であった。ところが、2019 年度最後の 2020 年 3 月に第 1 回のフィールド調査を予定していたところ、2020 年に入ってから新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的流行（パンデミック）が始まり、緊急事態宣言も発出されるなか、やむをえず延期となった。その後も、何度も感染の波が断続的にやって来るなか、何とか合間を縫って渡航できないものかと計画するたびに断念せざるをえない状況が続き、やむなく、研究期間を 1 年間延長し 2022 年度までとした。

2022 年度も感染は 2 月を山とする第６波、8 月を山とする第７波と続き、もはやフィールド調査を諦めざるを得ないかと危惧しながら、それでも 2023 年 3 月までのどこかで渡航できるようになることに最後の望みを賭けつつも、共同研究の比重をフィールド調査から文献調査へと移して、むしろ本論文集の刊行に力を入れることへと移行していった。2023 年 1 月を山とする第８波が 2 月になって収まってきたのを見て、急遽、3 月上旬から中旬にかけて最後のチャンスと渡航を決め、当初複数で行く計画であったが、それぞれ諸般の事情から叶わず、結局、筆者が一人でフィールド調査のため渡航することとなり、その研究報告は本書第８章にまとめることができた。

20 世紀初頭 1918～1920 年の通称「スペインかぜ」（正確には、「H1N1 亜型インフルエンザ」）以来、100 年に一度の世界的パンデミックがかつてと同様に 2020～2023 年と３年間続くなか、私たちの共同研究も当初の計画通りには進まず、予定変更をせざるを得なかったが、小規模なものとはなったもののフィールド調査（訪問・インタヴュー）もすることができ、本書のような形で論文集を研究報告書として編むことができ、とりあえずは将来へ続くための足がかりとなるものを残すことができたと考えている。

共同研究者の皆様に感謝するとともに、読者からの助言・批判を仰ぐことができれば、幸いである。